

【親鸞部門(高校)・優秀賞】

当たり前なんてない。

私立大谷高等学校 第3学年 徳田彩乃

お母さんとお父さんは、突然自分の前から消えたりしない。これは両親がいる子どもなら誰でも、無意識のうちに仮定してしまっていることだと思う。実際私もその一人であった。

私は幼い頃、父親のことは好きで、母親のことは嫌いと言う子どもだった。もちろんこれは、父も母もずっと自分の隣にいてくれるものだと信じていたから言えたことだ。そしてある日、母が病気で亡くなった。父にとってはどうだったか知らないが、私にとっては当然のことで、それから数年間は実感が湧かなかった。時が経ち、私は母の存在を当たり前だと思っていたことに気づいた。その時、私にとっての当たり前が、当たり前ではなくなった。当時小学二年生だったとはいえ、母とはたくさんの時間を過ごしたはずなのに、母の笑った顔だけは思い出せなかった。

中学生の時、私は当時愛読していた漫画の影響で、未来の自分から過去の自分に手紙を出そうとした。内容は、未来の自分の後悔を消してほしい、というもので、自分が母に反抗的な態度をとってしまったことから日々の自分の言動まで、様々だった。しかし、手紙を書きながら、今までの自分の経験を消すことで幸せな人生を歩める自分がいるのだろうかと考えた。良い経験も悪い経験も、そしてそれが後悔していることであっても、そのどれもが今の自分の糧になっている。過去にしがみつくのではなく、今日や明日、そして明後日を大切にしたい。その時私は思った。後悔するよりも、明日やってくるであろう未来を楽しみに生きよう、と。

私は未来に伝えたい。どんなにつまらない日々であったとしても、今を生きてほしい。今ある日常が当たり前だと思わず、一つ一つの物事や瞬間、感じた思いを大切にしてほしい。今までの自分の経験は、必ず私を強くする。そう信じて生きていてほしい。